

質疑応答

▼横井 本日、お集まり頂いた方のアンケート用紙に書かれた質問を私が読み上げますので、講師の方に答えていただく形で進めてまいります。最初は田中先生への質問です。「古筆鑑定とは、どの部分に目を付けて行うものなのでしょうか？」

▼田中 非常に本質的で難しい質問ですね。現代の人が鑑定するのは江戸時代の人が鑑定するのでは違います。江戸時代の人の場合はまず書風です。書道の歴史の上で典型的な、後世真似されるような書を書いた人、例えば鎌倉初期の後京極良経、藤原家隆のような人をポイントとして、たくさんある古筆切をどの書風に属するかで分けます。それをさらに紙の質を大ざっぱに判断し、鎌倉初期か中期か後期かという時代鑑定をして、鎌倉初期ならば家隆でしょう、また、もう少し時代が下るならば誰それでしょう、というような鑑定方法です。これは

大ざっぱな方法なので、大体九九パーセント間違っています。だが、単に間違っているという言い方はあたっていない。何万枚、何十万枚と伝わっている古筆切を書風、時代によって分類した分類記号が極札（古筆鑑定の証拠として添える短冊）であると考えれば良いと思います。短冊に「芭蕉」と書いてあるとして、これが本物であるか偽物であるかという問題と、この古筆の極札が、例えば「紀貫之が書いた高野切」とあって、その貫之が当たっているかどうかは、次元の違う話です。平安朝の非常にすぐれたもので、紀貫之であれば古今集を当然書いているでしょう。あまたある古今の古筆切の中で古い時代のものならば紀貫之が書いたとしても不思議ではないわけです。それが「貫之」という符号だと考えればいいのです。現代の鑑定には科学的でコンピュータを使うものや、私のように「カンピューター」という場合もあり（笑）、いちがいに言えませんので、本日は省略させていただきます。

▼横井 次は別府先生です。池田先生への質問のように

思えるのですが、質問先は別府先生となっております。
「年代測定に科学的分析を使うことができるそうですが、その測定を使わないのでしょうか？」

▼別府 科学的測定というのは池田先生がおっしゃったように、紙は植物ですから、その炭素を調べて行う測定のことだと思います。またX線による測定もあります。ただ、博物館、美術館に収蔵されているものは美術品です。池田先生が紙を一ミリ幅で切り取って測定されたのは、それが個人蔵だったからで、館藏品などは、美術品として、それは決してできないことです。その測定がどんなに重要であっても、作品の現状をこわすことは絶対にしてはいけないことなのです。

また、その作品に強い力を加えて、顔料、墨などを調査することも許されません。ただ、現在は光学的分析法というのがあり、作品に触れずに、作品を損傷しない光をあてて、例えば顔料の質を調べるといような科学的分析法もとられています。出光美術館が所蔵している「伴大納言絵巻」の失われた部分に何が描かれていたか、

その顔料の性質とかを調べています。つまり、その作品が劣化しないという条件なら、科学的分析を行うことはあります。池田先生がなされた方法はかなり特殊なケースですが、その他の古筆切も池田先生の測定されたものと「つれ」であることがわかれば、測定結果はそのまま適用されるという面はあります。

▼池田 私の希望としては、公的機関でもやっていただきたいと考えています。ただ、出光美術館のような私立美術館では無理でしょう。文化庁で古書画をまくりで購入した場合は一ミリぐらいは切ってもいいじゃないか、古筆切は元々切つてあるものだから、と私自身は思っています。ただ、それは国の文教行政の問題でしょう。文教行政が真実の追究に前向きになって、科学的分析に寛容になれば、いいと思います。天皇陵の発掘ができないのと同じです。

▼横井 かつては科学的検査というと大量の試料が必要でしたが、技術が発達して、名古屋大学のタンデントロン（加速器質量分析装置）のように少ない量でも分析でき

るようになりまして、一センチ四方の大きさがあれば十分だということで、最近はこちらに小さくても大丈夫のようです。

次は池田先生への質問です。これはどうやら我々と同じ業界の方からの質問だと思われます。「当該の切れ二葉による調査結果をお伺いし、また古系図の様子を伺うにつれ、ますます巢守の巻の一部という気がしてきました。鶴見本に『薫中将みたまひて、語らひよりましたまふ』とあるのが、切の『そいふし給』と合致するのでしょうか」と、ここまでは質問というよりフエイントのようなものです。「当該の切二枚と同じ筆跡の『源氏物語』の写本がありはしないのでしょうか？ もし巢守の巻が『源氏物語』写本と揃いで写されていたということも明らかになれば、実にうれしいことです」。さらに参考として「天理図書館や蓬左文庫に似たような字のものがあつたような、なかつたような気がします」とあります。

▼池田 初めの古系図との関係についてですが、残念ながらそれだけでは、あの場面であるということは断定で

きないと思います。後のほうの問題ですが、あれと同じ筆跡の古筆切はないか、ということには関心を持っています。なおかつ、『源氏物語』の中で同筆のものが出てくれば、巢守の巻が『源氏物語』の一部だったというところがはっきりして、ありがたいことなのですが、現在のところ確認できていません。ただ、あの字形は非常に癖があり、バサバサした感じの線質で、ちびた筆で書いたものです。このような筆跡のものは確かに他にもあります。『源氏物語』の古筆切の中の、伝西行筆になっている宿木の巻の断簡数葉です。これもバサバサした筆跡です。しかし、良く見ると、似た筆跡ではあっても同筆ではありません。私もこれから、似た筆跡のものを探したいと思つていますが、できれば皆さんにも探していただきたいと思つています。

▼横井 巢守の巻というのは、非常に重大な問題を含んでいます。かつて『源氏物語』を校訂された今西先生にもコメントを頂きたいところですが、いかがでしょうか。

▼今西 一般論として、『源氏物語』から派生した続編のようなものがあつたことは十分に考えられることです。大きな物語の後にそれに付随して小さな物語が生まれることはあることで、『狭衣物語』なども『源氏物語』

を意識した物語だろうと思われまふ。もし巢守の巻と同じ筆跡の『源氏物語』写本があれば、それはそれで重要なことですが、そうでなくても、『源氏』の後を書くというのにはありうることです。『山路の露』のようなものもあるわけですから。逆にお訊きたいのは、『山路の露』と同じ筆跡の『源氏物語』写本はあるのでしょうか？

▼池田 いや、存じません。

▼横井 質問の中にも、「山路の露との関係は？」というのがありました。

▼池田 『山路の露』の作者は、院政期の建礼門院右京大夫という説があります。古ければ院政期、もしくは鎌倉時代末から南北朝ぐらいという説であつたと思いません。さきほど触れた『白造紙』などには出てきません

し、一緒にせずに、別のものと考えておいたほうがいいと思います。室町期に作られた雲隠六帖もあるわけですから、みんな一緒にせずに別々に考えたほうがいいと思います。

▼横井 池田先生がおっしゃっている「別伝」という概念はどのように捉えたらいいのでしょうか。

▼池田 先ほど述べましたように、現行五十四帖以外の巻として伝わっている、それだけの意味で今は使っています。あまり深く考えないでください（笑）。

▼横井 これは専門的質問になりますが、亡くなった稲賀敬二氏が「源氏物語の類」という考え方を持たれました（『源氏物語の研究―成立と伝流』笠間書院）。ある時期の人々は、紫式部が書いたものだけでなく、その周辺の作品も含めて「源氏物語」と考えていた、というのです。確か、『山路の露』はともかく、巢守の巻については、「源氏物語の類」と考えておられました。それに付いてはいかがでしょうか？

▼池田 「類」という考え方なら、それはそれでいいの

ではないかと思えます。少なくとも『白造紙』に出てくるような形で列挙してあるのは、その時期に「類」として把握されていたことだと思います。ただ、現在の我々がどこまで含めて考えるかというのは、また別の問題で、かなりいろいろ慎重な段階を経ないと言えないと思います。

▼横井 ただ巢守の巻らしきものがこうしてあるとなると、巢守もけっこう古いわけです。そうなるも池田先生がおっしゃった『山路の露』もかなり古いものとなりま。これは田中先生にお伺いしたいのですが、『山路の露』が院政期、平安時代の後期にできたとすると、その古筆切というのではないんでしょうか。

▼田中 ないと思えます。『山路の露』がそんなに古いとは、私は思っていません。ただ池田先生にお伺いしたのですが、巢守の巻の話が『源氏物語』の宇治十帖、薫・匂宮・浮舟といわばセットになるということを前提とすると、ある時期宇治十帖と同居しえた話なのでしょうか。そうになると、ずいぶんゴチャゴチャした話になる

と思うのですが。

▼池田 それは、先ほどの「類」をどこまで含めたものとして考えるかという問題になると思います。巢守の巻が『源氏物語』五十四帖にくつついた形の『源氏物語』が本当にあったのか、それとも、続編かおまけのようなものとして読まれたのかと考えると、やはり後者のほうだろうと思います。

▼今西 私が漠然と思うのですが、匂宮、薫は宇治に通います。それはそれで面白いのですが、宇治ではなくて、あの二人が、あのような似た姉妹と別のところで恋物語を展開する、そういうストーリーを作ってみたらさらに面白いのではないかと、そういう側面も巢守の巻にはあるのではないかと思えます。ストーリーは非常に似ていますね。匂宮も薫も巢守の君と通じている。さらに薫は中の君と通じている。これは故意に、同じストーリーを別の設定で展開させたらどうなるか、という興味で書かれたような気がします。

▼横井 さて、今西先生への質問です。「時代が下ると

漢字表記の傾向が見られるという視点を呈示くださったこと、興味深く拝聴いたしました。変体かなについて、時代が下るにつれ、字母が変化するということはないのでしょうか？」

▼今西 池田先生のほうが詳しいとは思いますが、あえてお答えすれば、あると思います。平安時代に使われていて、鎌倉時代にはほとんど出てこない文字があります。紀貫之の土佐日記の「おとこもすなる」の「す」の文字が今でいう「あ」みたいな文字になっています。あれは「数」という文字を崩したものです。為家本にもその横に「寸」という字で読みが示されていました。それほど、「数」を「す」と読むには、鎌倉時代の人ですらなじみがなくなっていたわけです。江戸時代ではまったく出てこないし、室町時代でもきわめて少ないと思います。そういう字はいくつかあります。

このようにして、かな文字は整理されていきますが、残っている部分もかなりあって、最終的に整理されるのは明治三三年の「小学校令施行規則」によるひらがなの

制定です。個人差はあるでしょうが、経済性からいってもそうなので、徐々にひらがなは、字体が単純化されていきました。

▼横井 では別府先生、同じ質問ですが、経験から感じられた範囲で結構ですのでお話しください。

▼別府 先ほどの話ではあえて端折りましたが、室町期のかなが、座ったように見える、豊満になっていくのは、漢字との共存という理由もありました。今西先生もおっしゃいましたが、平安時代に和歌はほとんどかなだったものが、鎌倉期に入ると、自詠自筆の和歌懐紙でも漢字が入るようになり、時代が下るにつれ、漢字が多くなっていきます。室町期にはさらに漢字が増えていきます。かなばかりで構成されものと違い、漢字を交えた紙面では、かなは漢字に負けないようにつばに大きく見せる必要がありました。平安時代のようなかなではスマート過ぎるのです。そこで筆の振幅が大きくなったと考えられます。漢字と併存することによるかなの形の変化というのも考えておかなければいけないと思います。

▼横井 次の質問は、特定の先生に向けたものではないので、全員にお答えいただきましょう。「全般的に『源氏物語』の古筆切について、河内本、青表紙本などの分類との関係はどのようになっていのでしょうか？」という質問です。

▼田中 高度で難しい質問ですね。青表紙本がもつともスタンダードであるというのがこれまでの学界での位置付けとなっていますが、それはもつばら、研究の歴史に関わることで、鎌倉時代までさかのぼる古筆切を見えますと、特に中期、初期までいくと、河内本や別本のほうが目立ちます。これは、考えると当たり前のことで、当時の学問＝書写活動というのは、家学として親から子へ、さらに孫へと伝えていくのが第一目的でしたから、定家が書写活動をしたからといって、それが直ちに世の中に広まっていくわけではなく、長い時間をかけて歌聖といわれた定家が書写したのとして浸透していったわけです。現在はその定家の手による青表紙本系統が活字本の底本となることが普通ですが、近年、古筆切にかか

わらず、鎌倉時代の『源氏物語』の写本が発見されていますが、それは青表紙本以外のものが多いのです。逆に言えば、それらが別本だからといって、大騒ぎするほどのことでもないといえます。つまり、現在のこれまでの研究の歴史の結果として重視される青表紙本を基準にする必要はないということです。

▼池田 私がこれまで集めた『源氏物語』の古筆切が二、三十枚ありますが。アトランダムに集めたものですが、それらの本分系統を別調べてみますと青表紙本よりも河内本と別本の方が多かったです。書写年代は主として鎌倉期のものです。したがって、鎌倉期に定家の青表紙本がどこまで広まっていたのかは、疑問があると思っています。

▼横井 池田先生は古いものをなるべく集めようとされているから、古いものに片寄ってくるということなのでしょうか。

▼池田 そうではなくて、鎌倉期の『源氏物語』の古筆切を分類したら、そうなったということです。青表紙本

を集めよう、河内本を集めよう、別本を集めようとしたのではなく、たまたま手元にあった古筆切を分類したら、そうなったということです。

▼別府 私には『源氏物語』の内容についてはよくわかりませんが、青表紙本、河内本のことに表れているように、後世の基準で物事を決めてしまっているようなところがあると思います。活字、すなわち版本になっていると、どうしてもそれに権威がついてしまっているような気がします。古筆切というのは、まさにその時代に書かれたテキストとなわけで、そこから直接に重要なことを受け取れる存在だと思います。鎌倉時代の古筆切に関して青表紙本が決して多くないというのも、生の古筆切だかこそ得られる情報だと思っています。

▼今西 古筆切を待つまでもなく、鎌倉時代、室町初期の注釈書『河海抄』や『花鳥余情』を見てみると、引用されているのは河内本です。それで思い出すのは『枕草子』です。『枕草子』は今日、三巻本が主流ですが、本

居宣長の日記を読んでいたら、宣長が松阪から大和に出てくる道中で、長谷寺のところで、「あれが枕草子に鐘が鳴ったと書いてある長谷寺の鐘の音か」と書いてありました。ところが、その箇所、三巻本では清水寺となっているのです。実は、江戸時代に版本として流布していた因本には長谷寺と書いてあったのです。宣長はこちらを読んでいたわけです。『源氏物語』もこういう現象と非常に似ているのではないかと思います。『源氏物語』での青表紙本と河内本の関係は、『枕草子』での三巻本と能因本の関係と同じことです。ですから、どちらが正統か、というようなことではなく、それぞれがどういうふうな、その時代に享受されたかを考えるべきだと思います。

▼横井 ほかにも質問はありますが、時間も長くなりましたので、この辺で終了させていただきます。なお、「元の所蔵者はいくらぐらいで手放したのか」「なぜ手放したのか」といった質問もありましたが（笑）、値段はいろいろなケースがあったでしょうから何とも答えよう

がありませんね。

本日は長い時間、皆様にはどうもありがとうございます。また、これでシンポジウムを締めくくらせていただきました。ありがとうございます。